様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ３０ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2017
課題番号：２６７７００７８

研究課題名（和文）終戦直後の新聞小説の研究―織田作之助を中心に

研究課題名（英文）Study of Newspaper Novels Immediately after the Second World War : Focus on Oda Sakunosuke

研究代表者
斎藤　理生（SAITO, Masao）

大阪大学・文学研究科・准教授

研究者番号：４０４３１７２０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では終戦直後の新聞小説の実態を研究した。衣食住にも事欠く時代に、それでも購読者の期待に応える形で連載された文学作品には、どのような特徴があるのか。1945年から1946年にかけて連載小説を4作書いた織田作之助を中心に分析した。作之助は「京都日日新聞」「大阪日日新聞」などの京阪の地方紙を中心に、記事や広告を活用した作品を書いていた。結果、連載当時の紙面には創作欄だけに留まらぬ面白さを備えた作品が成り立っていたこと、作之助が新聞小説という形式を問い直す試みをしていたことがわかった。

研究成果の概要（英文）：In this research, I investigated the actual contents of newspaper novels published immediately after the end of the Second World War. What are the distinctive features of these serialized works, devised to satisfy the expectations of newspaper subscribers in an era in which clothing, shelter and employment were all scarce? I mainly focused on Oda Sakunosuke, who wrote four serial novels from 1945 to 1946. These were published in local Kyoto and Osaka newspapers such as the "Kyoto Daily Newspaper" and "Osaka Daily Newspaper." Oda actively utilized articles and advertisements in these same newspapers, incorporating them into his works. This resulted in the creation of works which transcended the confines of the newspaper's literary section and provided a multifaceted entertainment experience to readers of that era. This study sheds light on such attempts by Oda to challenge the conventions of the newspaper novel as a literary form.

研究分野：3101

キーワード：新聞小説　新興紙　地方新聞　織田作之助

１．研究開始当初の背景

日本における新聞小説の研究は、高木健夫（1974-1981）の先駆的な業績以来、少なからぬ蓄積がある。近年にも関肇（2007）が、新聞メディアとその掲載小説が近代文学の生産と享受に与えた影響に新しい光を投げかけている。しかし、新聞小説が成立・普及していった明治大正期の研究の進展に比べて、昭和以降の新聞小説の実態や社会との関わりは、個別に重要な成果があるとはいえ、いまだ十分に考察されているとは言い難い。しかし昭和期は、読者数が飛躍的に増加し、新聞が最も身近な情報媒体となった時期である。本研究は、終戦直後の新聞小説を対象にすることで、この研究史上の空白を埋めようとしたものである。

本研究の特色は、新聞小説を、紙面全体との関わりの中で分析しようとした点にある。創作欄が激減していた混乱期に、それでも連載されていた作品を取りあげることで、社会の中で新聞小説が果たした役割を鮮明に浮かび上がらせることができると考えた。また、本研究によって、新聞小説に映し出された終戦直後の世相の表象を知ることも目論んでいた。もちろん文学作品は、時代を直接的に反映する鏡ではない。GHQ/SCAP による検閲も考慮せねばならない。だが新聞小説とは、毎日新たに発行される媒体において、不特定多数の読者を対象に書かれたものである。ならば他の媒体で発表された作品以上に、時代や世相に敏感であったことも事実であろう。その意味で本研究は、歴史学やメディア研究への貢献を含むと言える。

さらに本研究では、織田作之助という、一般的には「大阪の作家」として知られ、文学史では「無頼派」の一員としてのみ扱われがちな作家の創作活動の再評価を目指した。元新聞記者であり、いわゆる純文学の他に映画やラジオドラマのシナリオ作家としても活躍していた織田は、作品を発表する媒体とその受容者を強く意識して新聞小説を書いたと考えられる。また織田は、新聞小説内で新聞小説論を展開することもあった。こうした前衛的な手法は、新聞小説という表現形式を再考する手がかりにもなるに違いない。

申請者は斎藤（2012）で、織田作之助『それでも私は行く』（1946）と「京都日日新聞」との密な関係を明らかにしていた（後述）。また、斎藤（2008）でも、太宰治『グッド・バイ』（朝日新聞,1948）を分析し、当時の世相や流行語が積極的に取り入れられていた様を明らかにしていた。本研究では、織田と太宰以外に、同時期に熱烈な支持を得ていた作品にも触れる。そうすることで、1945 年から 1948 年までの新聞小説の多角的な検討を試みた。未曾有の混乱期に、小説はメディアや読者に何を求められ、どのように応えたのか。その検証は、文学の社会的役割が問われ、読書媒体も多様化している今日の状況を歴史的に検討する視座を与えるはずである。

高木健夫（1974-1981）『新聞小説史』,国書刊行会
関 肇（2007）『新聞小説の時代　メディア・読者・メロドラマ』,新曜社
斎藤理生（2008a）「田島周二の遁走―『グッド・バイ』論」,「太宰治スタディーズ」,2
斎藤理生（2012）「織田作之助『それでも私は行く』論―「京都日日新聞」を手がかりに―」,「國語と國文学」,89(10)

２．研究の目的

本研究では、終戦直後の新聞小説を、報道記事や広告欄など、創作欄以外の紙面との関わりを視野に入れて分析する。分析を通じて、この時期の新聞小説の特徴と、その社会的役割を明らかにすることが目的である。

主な対象とするのは、1945 年 9 月から 1946 年 12 月にかけて、地方紙に 3 篇、全国紙に 1 篇の小説を連載した、織田作之助の作品である。織田作品の分析を軸に、太宰治や吉川英治らが同時期に書いた新聞小説との比較を行う。そうすることで、織田という作家の特徴はもちろん、当時の新聞小説の特徴、世相との関わり、地方紙と全国紙との差異なども明らかにする。さらに、このような研究は、近代小説とメディアと読者との関係を再検討する歴史的な視座を得ることにもつながるはずである。

３．研究の方法

終戦直後の新聞小説という領域で、それぞれの新聞社や作家たちは、作品ごとにどのような姿勢を見せ、読者にはいかに読まれたのか。本研究は三つの角度から考察を進めた。

（１）終戦直後の地方紙における新聞小説の分析―織田作之助作品を中心に

織田作之助が敗戦直後の地方新聞に連載した小説を分析した。分析にあたっては、小説そのものだけでなく、報道記事や広告なども視野に入れた。終戦直後でわずか 2 面しかなかった当時の紙面にひしめいていた報道記事・創作欄・広告は、本来レベルの異なる言説でありながら、相互に影響し合っている可能性が高い。そのような新聞紙面全体を見据えた分析によって、終戦直後の新聞紙において創作欄に期待されていたものも明らかになると考えた。

申請者は既に 1946 年 4 月 26 日から 7 月 25 日まで「京都日日新聞」に連載された『それでも私は行く』の分析を終えている。この小説に関して特筆すべきことは２つある。

１つは、小説の舞台が、新聞が購読されていた京都に設定され、物語に同時期に紙面に載った報道記事や広告と対応する部分が散見されるだけでなく、逆に作家の取材ぶりや小説の流行に関する記事が報道されたり、小説の題名をもじった広告が出現したりする

等、虚構と現実との相互浸透が紙面で繰り広げられていることである。
　もう１つは、作品中に京都の新聞に「それでも私は行く」という連載小説を書こうとしている作家が登場し、新聞小説論をも語ることで、メタ新聞小説になっていることである。
　つまり、新聞紙面全体と結び付こうとする力と、新聞小説という枠組みを対象化しようとする力と、この小説には異なる２つの力が働いている。この力学が、織田の同時期の作品『十五夜物語』と『夜光虫』ではどのように働いているのか分析する。

（１－１）織田作之助『十五夜物語』論―「産業経済新聞」を手がかりに
　冒頭で語り手が、最近の新聞小説は読者の期待に応えていないと批判する、メタ新聞小説であることに注目して分析する。同紙に戦時中連載されていた吉川英治『太閤記』に対し、舞台を関ヶ原の戦いの後に設定し、太平洋戦争後になぞらえた風刺小説になっていることも視野に入れる。

（１－２）織田作之助『夜光虫』論―「大阪日日新聞」を手がかりに
　キタとミナミの闇市や中之島公園他、終戦後の大阪が積極的に描かれた作品であり、当時の報道記事との対応が予想される。また、途中で「作者」が登場し、一部を映画シナリオ風の表現にする等、新聞小説としては型破りな方法を取っている点に、新聞小説という形式への批評が読み取れると考える。

（２）終戦直後の全国紙における新聞小説の分析―織田作之助『土曜夫人』を中心に
（１）の分析結果を踏まえて、同時期に全国紙（讀賣新聞）に掲載された織田の『土曜夫人』を、「作者」の介入や、主人公が 17 人いるという破天荒な形式に着目して分析する。その際、以前論文化した、太宰が全国紙（朝日新聞）に連載するために書いた『グッド・バイ』とも比較する。

（３）太宰治の新聞小説の考察と比較―『パンドラの匣』を中心に
（１）（２）の分析を踏まえて、同時期に仙台の地方紙（河北新報）に連載されていた太宰治『パンドラの匣』を、一篇がどの程度紙面と連動し、また独立していたのかに目を配りつつ考察する。具体的には天皇や「自由主義」をめぐる作中人物の言葉を、当時の「河北新報」の投書欄や社説や報道記事と比較する。また、挿絵との関わりにも注目する。

４．研究成果
　研究の方法（１－１）から論文「織田作之助『十五夜物語』論」を発表した。『十五夜物語』はポスト戦国時代を舞台に、武力による出世功名を求める主人公を滑稽な夢想家として描いている。それは二週間前まで同じ新聞に連載されていた吉川英治『太閤記』と対照的であり、その意味で戦後にふさわしい作品であった。冒頭と末尾に「人間界」から離れた雷の世界を設定し、さらにこの小説を作っている楽屋裏を描くことは、戦争を「諷刺」するねらいと連動していた。『十五夜物語』には、敗戦から占領へと事態が着々と進行するなかで、そのような「人間」の営み全体を俯瞰する目が存在する。目前の現実にとらわれない、悩みを笑い飛ばす自由な視座を提示しているという意味で、「新聞小説の常識」を破ろうとした意欲作だと言える。が、現実の不安と困難で埋め尽くされた当時の深刻な新聞紙面にはそぐわず、空回りしている面も否定できない。『十五夜物語』は、「風変り」な主人公による新しい新聞小説を書こうとした「作者」が失敗する話にもなっているのである。単行本収録時に「形式の自由」への再挑戦を語った織田は、この後に書いた新聞小説では主人公らしい主人公を書かなくなっていく。標的は人物から世相へと移る。織田はその世相を描くために、改めて新聞という媒体を積極的に利用していった形跡がある。
（１－２）から論文「織田作之助『夜光虫』論―「大阪日日新聞」を手がかりに―」を発表した。『夜光虫』には新聞小説として構成の工夫がなされているだけでなく、復員兵による外部の視点の導入、語り手の前景化、紙面との連続性といった「世相」を描く多様な試みがなされていた。また、一篇の主題である「偶然」は本文とメディアとの界面においても起こっていた。『夜光虫』は初出紙で読むと、紙面の現実と重なって現実感が補強される。意外な人物が次々に出くわす内容が思いのほか紙面と重なることで、当今の世相が「偶然」に支配されているという主題が立体的に浮かび上がる。紙面と小説との重なりは、娯楽性を高めるのと共に、権力を相対化する役目を果たすこともある。むろん織田がどこまで新聞社と手を組んだり、配慮したりしたのかは推測に頼らざるを得ない部分も多くある。中学時代から交友のあった吉井栄治が記者として勤めていた影響も無視できまい。いずれにせよ『夜光虫』が最後まで新聞社の期待に応える作品であったことは間違いない。「京都日日新聞」に続き「大阪日日新聞」でも新聞小説を成功させたことで、一九四六年の京阪において、織田作之助の名はかつてないほど浸透していたはずである。その人気が「読売新聞」の目にとまり、『土曜夫人』の連載につながっていったことは想像に難くない。敗戦直後の織田がメディアの寵児となった背景には、京阪の新興夕刊紙との密な関わりが大きな役割を果たしていたのである。
　研究の方法（２）から論文「織田作之助『土曜夫人』論―「読売新聞」を手がかりに―」を発表した。織田作之助は『土曜夫人』で、

土曜の夜から日曜の夜の京阪という限られた時間と空間の中で、多くの登場人物の動向を同時進行で語る。年齢も社会的階層も異なる男女が偶然に会い、すれちがう様子が描かれる。また、「作者」を登場させたり、新聞を丹念に読む人物を描いたりすることで、メタフィクション構造を組みこみ、紙面と重なる〈世相〉を作中に取りこむことで、物理的にも虚構と現実との距離が非常に小さい新聞において、創作欄と他の記事との境界を低くするねらいがある。また、作品には紙面の政治欄や広告欄、当時報道されていた誘拐事件などと重なる内容が取り入れられている。それらの方法が効果を上げた一方で、地方新聞の身の上相談をそのまま流用する試みや、大阪の大事件を東京の新聞に持ちこむ方法は、中央の新聞である讀賣新聞の読者には通じにくかった可能性を指摘した。

研究の方法（３）に関わって、論文「文学作品の輪郭―『大造爺さんと雁』『走れメロス』『パンドラの匣』」を発表した。太宰が「河北新報」に連載した『パンドラの匣』には多くの挿絵が付いていた。挿絵はただの本文の付属物ではない。挿絵の方が本文より先に受容され、読解の枠組みを形成する可能性もある。特に、多種多様な情報が一つの面に展開する新聞紙面では、挿絵を見ずに本文のみを読むことはむしろ不自然である。『パンドラの匣』で言えば、多くの新聞読者は、太宰の小説本文を読む前に、まず恩地孝四郎が描いた絵を見たはずである。その挿絵が登場人物の印象を方向付けることは言うまでもない。実際、当時の紙面で読むと、挿絵への登場回数の多少によって、単行本とは別の人物に焦点が当たっているように見えることがある。また、画家は挿絵に文字を書き込むことで読者に独自のメッセージを発信してもいた。しかしそれらの効果は、挿絵が 50 枚ほど減らされ掲載順も再編された初刊本では減少し、挿絵を掲載しなかった再刊本ではすべて失われた。現在の全集や文庫でも失われたままである。しかし敗戦直後には、挿絵を踏まえた、今とは大きく異なる『パンドラの匣』の読み方があったのである。

以上のように、本研究では、終戦直後の新聞小説を、織田作之助の作品を中心に考察した。それらの分析によって、終戦直後でわずか 2 面しかなかった当時の紙面にひしめいていた報道記事・創作欄・広告が、本来レベルの異なる言説でありながら、相互に影響し合って独特の効果を上げていることがわかった。その傾向は特に地元の比較的限られた購読者を対象にしていた地方紙において強く見られる。たとえば「大阪日日新聞」に連載された『夜光虫』では闇市の存在意義が登場人物たちに問われるが、それは 1947 年夏の大阪における闇市封鎖に関わる紙面の報道や議論と連動して読めるようになっている。

また、日本の伝統的な小説作法を鋭く批判していた作之助の特徴として、新聞小説の中で作中作家に新聞小説批判をさせたり（『十五夜物語』『それでも私は行く』）、小説を突然シナリオ形式に変更したり（『夜光虫』）、主要登場人物を極端に多くしたり（『土曜夫人』）と、新聞小説という形式を批評し、更新する試みがなされていたことも明らかになった。

また、作之助以外に、同時期に仙台の地方紙（河北新報）に連載されていた太宰治『パンドラの匣』（1945-1946）を、一篇がどの程度紙面と連動し、また独立していたのかを挿絵を軸に考察した。太宰の作品も、作之助ほど積極的ではないにせよ、当時の紙面においてこそ理解できる部分が少なくないことがわかった。

このような成果によって、当時の地方新聞と読者との密な結びつきが確かめられ、かつ作之助という作家の独自性もより深く理解できるようになった。また、衣食住にも事欠きがちな時代に、それでも人々は小説を求め、楽しんだこと、また作家もそのような読者の期待に応えながら、自らの問題意識に沿った新たな試みを行っていたことがわかった。このような事実は、文学（作品）の社会的な役割を見直す一端となるはずである。

同時に、調査の過程で坂口安吾の初出不明であった随想（神戸と九州の新興紙夕刊紙に掲載）について初出を確定した。さらに、小林秀雄の全集未収録資料（九州の新興夕刊紙に掲載）を発掘することができた。後者の発掘は「朝日新聞」等のメディアでも大きく報じられた。1940 年代の新聞における文藝の実態を把握することは、新聞小説に限定せず、より広げられる余地があり、社会的なインパクトも大きいことがわかった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　5　件）

織田作之助『土曜夫人』論―「読売新聞」を手がかりに―
斎藤理生
語文（106・107）156-169 2017 年 2 月

【研究ノート】安吾・新興紙・棋戦―「坂口流の将棋観」「観戦記」の初出をめぐって
斎藤理生
坂口安吾研究（2）104-117 2016 年 3 月

織田作之助『夜光虫』論―「大阪日日新聞」を手がかりに―
斎藤理生
國語國文 84(12) 1-18 2015 年 12 月

織田作之助『十五夜物語』論
斎藤理生
語文（104）1-13 2015 年 6 月

文学作品の輪郭―『大造爺さんと雁』『走れメロス』『パンドラの匣』
斎藤理生
語学と文学（51）1-12 2015年3月

〔学会発表〕（計　3　件）
織田作之助『土曜夫人』論―新興地方紙から「読売新聞」へ
斎藤理生
新聞のなかの文学　2016年8月5日

織田作之助の新聞小説―『十五夜物語』『夜光虫』を中心に
斎藤理生
大阪大学国語国文学会　2015年1月10日

太宰治の小説の輪郭―教科書・新聞・文庫
斎藤理生
群馬大学語文学会夏期大会　2014年8月17日

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
斎藤　理生（SAITO, Masao）
大阪大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：40431720

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）